

農村から見る現代中国社会の変動

内 山 雅 生

はじめに

現代日本人にとっては、中国とは「不可解な国」という固定観念からなかなか脱却できないのが現状であろう。

特に二〇一二年九月の日本による「尖閣列島国有化」を契機とした両国政府の対立と、中国の主要都市における反日運動の激化は、記憶に新しい。しかし国有化問題以前から、尖閣列島のみならず、日本近海での中国漁船と日本漁船のトラブルは後を絶たなかった。ただ近年、中国をめぐっては、海洋資源や天然ガスの開発をめぐって、韓国、さらにフィリピンやベトナムなどの近隣諸国との間に摩擦が

生じていることも勘案すると、単純に二国間問題として決できる範囲を超えた課題が関与していると言えよう。

中国が日本を抜いてGDP第二位の経済力を持つほどに成長し、宇宙衛星の成功を誇示するだけの科学技術立国になったかのように思える一方で、繰り返される新幹線や地下鉄をめぐる新交通システムでの重大事故を見ると、国際社会の危惧する不安は解消されるどころか、「不可解さ」は増長され、異形の近代国民国家としての疑念を払拭できない。いちぐはぐな現代中国の現実がある。

そのような中で、一時期、かつての毛沢東時代の再来を想起させるかのような政治キャンペーンを張った薄熙来元

重慶市書記の解任と逮捕、そして無期懲役等の判決、薄の妻である谷開來の英国人実業家殺害事件での執行猶予付き死刑判決という、一連の事件の背景には、「毛沢東の中国」が終わって、「鄧小平の中国」が三〇年余も続いてきたが、一方で「社会主義」を標榜しながらも、現実には資本主義社会以上の「格差社会」を表出している現代中国の「光と影」を映し出している。

鄧小平時代に新たに生み出された「格差」は、「改革開放」経済の矛盾と指摘されて時久しいが、経済発展の原動力となってきた「民工」と呼ばれる都市へ移住した農民たちの世代交代も相まって、単に都市と農村、工業と農業という二項対立の中での問題解決を超えて、社会構造上の変化を迫るまでの様相を呈してきたと言えよう。

二〇一二年秋以降の習近平体制の確立の中で、李克強首相が目指す「格差の解消」は、「農村の都市化」と言われるように、農業離れが著しく、農業の機械化によってかうじて食糧自給を維持する都市近郊農村に限らず、機械化農業に追いつけない内陸部農村でも、都市と同等の消費生活を求める動きに対応せざるを得ない現状の存在を証明している。

従って、「不可解さ」と「格差の拡大」を併せ持つ現代中国を解明するためには、まずは中国農村の現実を知ってこそ、中国社会全体の抱える課題をやっと捉えることができるのであろう。本稿がそのための一助となれば幸いである。

なお、本稿は、二〇一二年五月一二日に開催された大阪経済大学日本経済史研究所主催「黒正塾」第一〇回春季歴史講演会での講演原稿を基礎としている。但し講演そのものは、参加者の中国農村への理解の促進も含めて、映像資料を多用し、また概説的な説明も加えたものであった。そこで本稿では、講演内容の主旨を変えない範囲において、筆者のこれまでの研究発表を中心に、現代中国社会の変動を農村に絞って紹介することをお断りしておく。

一 戦後日本における中国農村調査研究の歩み

(1) 『中国農村慣行調査』およびその再調査から見た中国農村研究¹⁾

戦後日本における中国農村調査研究を検討するには、まず戦中期において日本が、中国侵略を進める過程で、占領地域としての中国を、いかに理解してきたかという問題と

切り離して考えることはできない。この問題と関連して、一九四〇年代の前半期に、当時日本の南満洲鉄道株式会社（満鉄）調査部に所属していた研究者たちは、「中国社会における民衆の生活と法意識の解明」として、農民たちにインタビューを試み、河北省と山東省の六村落を中心に現地を調査し、関連資料の収集とも合わせて、膨大な調査成果を残した。

しかし、日中戦争の激化により、一九四四年に至り、この調査は打ち切られた。実質三年余にわたる間の調査結果は、一二三冊の『北支農村慣行調査』としてまとめられ、当時の日本の関連機関にのみ配布された。

やがて、戦後に至り、一九五二年から五八年にかけて、『北支農村慣行調査』は、「解説」と「索引」を付して、『中国農村慣行調査』全六巻として、東京の岩波書店から刊行された。

しかし、日中戦争という日本による中国への侵略戦争のもとで、日本軍の援護のもとに実施された調査であり、当然一九四九年の中華人民共和国の成立に結びつくような、農民の革命運動の息吹さえ感じられない限界が指摘され、日本の中国研究に活用しようとされることはなかった。

ところで、この『中国農村慣行調査』には、農民の「生の姿」を描こうとする調査指導者の東京帝国大学教授末広厳太郎の意向により、編集者による一切の加工もされずに、日本人調査者と応答者の中国農民との応答録が、そのままの姿で採録された。

その結果、個々の農家の家族構成や家計等についての詳細な記録も残された。いわば革命前の中国社会の実情を理解するうえでは、他に類を見ない貴重な文献資料となった。まして、応答録の再現ということもあって、他の満鉄調査部の報告書等のように、村の概要、政治的・経済的特徴、社会構造上の特質等が、端的にまとめられてはいなかった。

従って中国侵略を実施した日本軍が、本調査を利用して、より一層の農村統治策を立案することもできなかった。にもかかわらず、戦中期の「負の遺産」としての面だけが強調され、学界でも本格的に分析対象とする研究は登場しなかった。

そのような日本の社会情勢の中で、一九七七年秋以降、当時大学院生であった三谷孝（後に一橋大学教授）や筆者が中心となり、本調査を輪読し、華北農村社会の特質を明らかにしようとする研究会を発足させた。つまり、個人で

は読み切れないほどの分量のある資料を、集団による共同研究として輪読することにより、華北農村社会の特質を理解しようとしたのである。

やがて、研究会では本調査の熟読を通して、農民の生活や生産状況、村内外の人間関係、県と村との関係、社会経済的变化の様子、祭りや民間信仰の在り方等が具体的に検討され、いくつかの研究成果を発表した。

例えば筆者は、日本語著書としては『現代中国農村と「共同体」』（御茶の水書房、二〇〇三年）、及び『日本の中国農村調査と伝統社会』（御茶の水書房、二〇〇九年）を、中国語著書として『二十世紀華北農村社会経済研究』（中国社会科学出版社、二〇〇一年）を発表した。

しかし、文献調査の分析のみでは、彼ら農民を取り巻く風土や景観も含めて、農民の生活空間を実感することはできず、おのずと現地調査の必要性が認識されるようになった。

幸い、一九九〇年より、三谷孝を研究代表として、南開大学歴史系（現在の歴史学院）教授の魏宏運らとの共同研究が企画され、さらに現地行政機関の協力を得て、現地の農村調査を実施することが可能となった。

『中国農村慣行調査』の再調査地として訪問できた村落と訪問年月、応答者の数は以下の通りである。

- ① 北京市順義県（後に順義区）沙井村では、一九九〇年八月に延べ二五人を、一九九四年八月に延べ五二人をインタビューした。
- ② 北京市房山区呉店村では、一九九〇年八月に延べ三二人をインタビューした。
- ③ 天津市静海県馮家村では、一九九一年八月に延べ四二人を、一九九三年三月に延べ五三人をインタビューした。
- ④ 山東省平原県後夏寨村では、一九九三年三・四月に延べ八六人を、一九九四年八月に延べ五七人をインタビューした。
- ⑤ 河北省欒城県寺北柴村では、一九九四年一二月および一九九五年二月に延べ七二人を、一九九五年九月に延べ九二人をインタビューした。

旧満鉄調査部の調査員が調査した時から数えると、筆者たちは、約五〇年後に再調査を実施したわけである。調査村によっては訪問するたびに景観もふくめて激変するところもあれば、ゆっくりと変貌する様子を観察することがで

きた村もあり、華北農村の多様性に關して、身をもつて理解することができたといえよう。まして再調査できた村の多くは、行政当局が推進する改革のモデル村ではなく、ごく標準的な一般村であつた。

つまり土地改革・大躍進・人民公社・文化大革命・改革開放と激変していく各時期を通して、政治・経済・社会の各分野の変化から、一般村の姿を窺うことができ、村の視点や農民生活の視点から、「新中国」の歩みを垣間見ることができた。

その結果、三谷孝を中心にまとめられた再調査の調査報告集として、三谷孝編『農民が語る中国現代史―華北農村調査の記録―』（内山書店、一九九三年）、及び同『中国農村変革と家族・村落・国家』（汲古書院、一九九九年）、同『同上書』第二卷（汲古書院、二〇〇〇年）を、上梓することができた。

また一般の啓蒙的著書として、上記調査報告集を基礎とした三谷孝、内山雅生、笠原十九司、浜口允子、小田則子、リンダ・グロープ、中生勝美・末次玲子により『村から中国を読む―華北農村五十年史―』（青木書店、二〇〇〇年）を刊行した。

さらに前掲調査報告集は、中国側共同研究者である魏宏運たちの努力により、中国語版として、魏宏運・三谷孝主編『二十世紀華北農村調査記録』第一巻～第三巻が、二〇一二年に社会科学文献出版社から刊行された。

満鉄調査部等日本の調査機関が調査した村を再調査するという方法をとる、筆者を含めて、三谷を中心とする研究者のグループは、二〇〇五年からは河南省を、二〇〇六年からは山西省を研究対象に、農村研究を続けてきた。

やがてその成果の一部は、山西省臨汾市近郊農村の変容をまとめた三谷孝編『中国内陸における農村変革と地域社会―山西省臨汾市近郊農村の変容―』（御茶の水書房、二〇一一年）として刊行された。本書は、山西省の南部臨汾市近郊の高河店という地域から、中央の政治変動がどのように地方農村に波及してきたか、農民たちはそれに対していかに対応したのか、日中戦争期の調査記録が残る村の七〇年間から、長期的変容過程を追求したものである。

そのような研究方法は、二〇一一年三月に病死した三谷の遺志を継いだ筆者が研究代表者となり、山西大学中国社会史研究センター教授の行龍との共同研究として、山西省平遙県道備村を中心調査地に、「近現代中国農村における

環境ガバナンスと伝統社会に関する史的研究」として実施している。

(2) 現代中国農村社会における社会結合

現代中国、それも都市化していない農村社会は理解しにくいとよく言われる。その背景には、中国社会の近代化自体が、一時期の学界でも「半封建半植民地」と言われたこととも関連して、ヨーロッパ近代社会との比較から論じられてきたという、近代日本における中国研究の現実が存在した。

つまり、一九世紀後半期になって、ヨーロッパ・アメリカがアジアへの植民地化を一段と強化した過程において、アジアの側からすれば、果たして「眠れる獅子」と称された中国が、植民地化に対抗し、独立した国家として自立できるのか、期待と不安が混在化した中で、中国像が形成されていったことと無関係ではない。

そこで、本節では、現代中国農村にみられる社会結合を第一に村落内における農民の結合をどう考えるかという点と、第二に、「社会主義」という概念から、一九一二年以降の中華民国時代と、一九四九年以降の中華人民共和国時

代を断絶して考えるかということに論点を絞って論じてみよう。

まず、第一の論点から検討してみる。二〇世紀となって日本やヨーロッパ・アメリカの中国に対する経済的進出が、資本輸出という形態をとって、より複雑に進行する中で、現実の中国社会では、清朝に替わって中華民国になっても、国民統合とは程遠い、いわば軍閥割拠の状態が継続した。

果たして近代中国社会は、日本やヨーロッパ・アメリカの諸国と同質の社会構造を保有した、いわゆる近代的社会として確立し得るのかという疑念が、中国研究者の間にも拡大し、しばしば中国人の個別分散的行動を捉えて、「バラバラな砂」とも称され、その社会結合の脆弱さがその植民地的状況を招いたとも言われた。

そのような社会状況の中で、共に一九四〇年代の中国での農村調査の成果の一つである『中国農村慣行調査』の内容を分析しながらも、相反する見解を展開したのが、いわゆる中国社会における「共同体」をめぐる論争といえる「平野・戒能論争」である。

本論争の紹介については、筆者は拙著等でしばしば取り上げてきたが、中国社会における社会結合という点に絞り

ながら、以下に簡単に整理してみる。

つまり、満鉄のスタッフが中心となって実施された『中国農村慣行調査』を分析した平野義太郎は、日本や中国に共通する共同体として、「郷土共同体」論を提起した。平野の考えはやがて大アジア主義とも結びついて、「大東亜共栄体」の建設を主張した。⁽²⁾

それはアジアやアフリカを自国の植民地として、労働力と資源を搾取する帝国主義体制を形成した「西洋・近代文明」の残酷さを否定し非難する「反西洋・反近代」のアジア観に結びついた。

しかし、結果として日本のアジア侵略を擁護することとなり、大東亜共栄圏構想に結びついてしまった。

これに対して、同じく『中国農村慣行調査』を分析した戒能通孝は、脱亜主義的思考から、近代的市民秩序を肯定し、西洋・近代文明への積極的評価に基づいて、中国における「共同体」の存在を否定した。それはアジアへの侵略を推し進めていた「時局への抵抗」としての脱亜主義的思考であり、戦後日本における民主国家の建設に結びつくものであった。⁽³⁾

しかし、平野は引き続いて『中国農村慣行調査』等の調

査資料を分析しながら数多くの論文を発表し、結果として華北を中心とする中国農村の細部にわたる実像を紹介した。特に「社」「会」と呼ばれた社会結合について、積極的にその存在を強調し、中国社会の特徴とした。

中でも、河北省順義県沙井村（現在の北京市順義区沙井村）の「会（村公会・公会）」をとり上げ、「会」の世話人とも言うべき「会首」の集会や、「会首」の社会的地位、「会」の機能、「会首」と村長などの関係を検討し、次のように論究したことは周知の通りである。

里甲等の制度は歴史に多く現れ、また、官治の補助機関としての村坊里甲の作用も確かめうるけれども自然村落の詳しい内部の構造、「社」「会」の内的構成、それを支配統治する村の有力者の「会首」「首事人」や村の寄り合ひ、公会・市集・廟会の廟産の管理から村政・雨乞ひ等々、すなわち村民の自然的な具体的生活協同態の実相のことは、資料が甚だ乏しかったのである。

しかるに、満鉄・北支経済調査所の慣行調査報告『順義県沙井村に於ける質問応答（一）村落』に基く調

査者旗田巍氏の報告、この沙井村における村民の自然的な生活協同態たる「会」がよく聴取され、支那における自然村落の内部構造や村政の実態に関して好資料を提供してをる。これは村政がいかに自治的に運用せられ、支那の村が、数人の有力な「会首」「首事人」によつて、いかに治められてゐるか、官治機関としての村長が、この「会首」へ、いかに県からの官治を媒介し、また、生活協同態たる村が、いかに官治に対して自己を主張してゐるかを示してゐる。⁽⁴⁾

支那で「会」といふときは、集よりも遙かに大きい定期市を意味したり、頼母子講も「会」と呼ばれたり、「会館」の「会」であつたり、「看青会」の「会」であつたり、特に「廟会」の「会」であつたりする場合、主に自然的地縁的結合に従属し宗教・祭祀・同郷・取引等のために多数人の集まるのをいふが、ここにいふ「会」は、それと異り、村落の自治的要素のすべてを結合した地縁団体たる自然部落そのものたる「会」であつて、最も基礎的な「会」である。明代の里甲制より清代の保甲制へ移行する過渡期に比較的自然な自律

的組織に近い「会」があつたといはれるが、この村落の自治的要素のすべてを結合した比較的自然な自律組織に近いこの「会」が、官治の補助機関たる村長と組み合つて、いま沙井村の内部組織を構成してゐるのである。⁽⁵⁾

村長が村の公益、村民の共同生活に関するかぎり、いかなる事項に關しても必ず会首と協議・相談せねばならぬ以上、この会首の集合協議する公会が自然部落の自治機関であつて、この公会は、前清時代より存在するが、古来、政府の作つたものではなく、自然部落の自治機関である。そして、この会首の「公会」の背後には、県政府の命令によつて作られた保甲・隣閭制や国家の行政機関の単位たるべき行政村とは異なるところの自然的生活協同態たる「会」がある。この「会」こそ村民の自然的な生活協同態である。この「会」は廟を中心とし、地理と歴史とによつて自然に発達した村民の自然聚落に外ならない。村の財産を「会裏財産」といひ、廟産も公会の建物その他の村有財産をも統一して指称し觀念してゐることは、それ自

体において、この自然聚落たる「会」が廟を中心としつつ自然的に共同生活し、共同の村落組織に結成されて来てゐることを示す。⁶⁾

しかし、戦後日本において民主国家の建設が進行し、日本の中で「伝統的社会を克服した社会主義中国」というイメージが強まる中で、平野の示したデータは、あくまで過去の中国農村の断片を、「郷土共同体」という視角から取り扱った特殊なケースに過ぎないものとして理解され、日本の中国研究において、その価値は十分に評価されなかった。

従って「会」の実像も、そして農村社会における「社」の意味も充分には検討されてこなかった。いわば「社」「会」による社会結合を取り扱う研究は中断したのである。ところで、近年の現代中国に関する研究の中では、中国社会の特質が、かつてその存在を戒能たちによって否定された「共同体」的存在に注目しながら検討されている。

特に、鄧小平が主導した「改革・開放」経済体制が定着し始めた一九八〇年代にいたると、経済発展の一方で、沿海部と内陸部、都市と農村、工業商業部門と農業の間に、

社会的格差が拡大してきた。そのような状況の中で、現代中国が抱える問題は、社会の基底部に影響されているのだとする議論が、その社会結合の特徴と関連させて、提示されるようになってきた。

例えば、中嶋嶺雄は、「今日の中国農村の社会的諸断面は、先の『人民日報』の指摘を見るまでもなく、共同体原理の連続性をこそ示しているといわざるをえないように思われる。まさに中国の村落共同体は、その組織と行動様式を通じて、最も根強い社会的な惰性として今日にいたっているのである」と主張した。⁷⁾

さらに山本秀夫も、「改革・開放」経済体制に転換した中国農村において、その現代化・民主化が、「郷規民約」という伝統的な形式を採用していると主張した。つまり「郷規民約」という伝統的な社会的慣行が、村落の治安を維持し、「封建的」な悪習慣をやめさせることによって実現されつつある点に、西欧的近代化・民主化とは異なる道を歩みはじめたと見ることができると主張した。⁸⁾

さらに、石田浩は、『中国農村社会経済構造の研究』等の著作の中で、現代社会の日常生活まで含めて、人々の生活を「共同体」が規定しているとして、「生活共同体」を

提起した。⁽⁹⁾

石田によれば、「生活共同体」は、村外に対しては、国家権力による苛斂誅求、匪賊の襲撃、他族との械闘などの厳しい現実に対応した。

一方村内では、農民にとって不可欠な農業経営の維持、つまり洪水・旱害・蝗害への対策、さらに農家間の労働力交換や畜力交換などの生産条件での協力、水利、土地売買、小作契約での調整、さらに農民の日常生活の維持のために必要な金銭貸借、祭祀、結婚、葬式などで機能したという。

以上のように、かつて平野によって提唱された「会」などの、中国農村社会における社会結合を物語る組織に関する検討については、その実態像が部分的には提示されたといえようが、「平野・戒能論争」も含めて、理論的かつ実証的な問題については、未解決なまま今日に至っているというのが研究史の現状である。⁽¹⁰⁾

次に第二の論点を検討してみよう。毛沢東時代となつて、前述の社会結合はどのようなものになったのだろうか。このことと関連して、溝口雄三の中国論には多くのヒントが隠されている。そのことは、次のような一節に読みとることができ

伝統的な「天」の統治理念が「近代」思想としての社会主義思想に近似的あるいは適応的であつて、人民共和国は統治理念を組み替えながらも、それを基底にして結局、社会主義国家として成立した、ということである。

(中略)

通説的理解では、中国の社会主義革命は、国際共産主義運動の独自中国的展開であり、それは指導者毛沢東の、マルクス主義の中国的な適用に負っている、すなわち毛沢東はマルクス主義を中国独自なものに活用した、というものである。この見方は事実を正確に伝えたものであるが、外来の社会主義運動の側からだけみているという点で、事実を一面的にみた見方でもある。私は、この事実は、社会主義の側からだけでなく、中国の「天」の伝統的イデオロギー（そしてイデオロギーの土壌としての社会構造や社会関係）の側からも見られるべきだと考える。すなわち、国際共産主義運動の中国への流れからだけでなく、「天」の統治理念（同時に民間の社会通念）の近代的な展開という伝統の基床からも見られるべきである。⁽¹¹⁾

溝口は、以上のような視角から、一九七八年の鄧小平の主導した「改革開放経済政策」についても、「イデオロギーとしての社会主義」からすれば、「社会主義の後退、変質、挫折など」と見られるが、「社会や社会生活の実態に合わなくなった」だけであり、孫文が説明している中国革命の基本的な目的である「全人民が洩れなく豊衣豊食すること」に照らしてみれば、社会主義も人々の生活を豊かにするための社会主義のはずであったので、「計画経済が窮屈になればそれは当然改められる」と主張した。

そのような溝口の説明からすれば、「いわゆる中国的な社会主義思想」の実態は、「伝統的な儒家思想、経世思想、民間倫理、社会通念に融和するものとして受容された伝統の文脈に脈絡づけられている」のであり、「中国で、社会主義の受け入れ、あるいは中国内への引き込みを果した基床というのは、統治理念だけでなく、前述のように清代に民間に張りめぐらされた宗族制や宗教結社などの相互扶助・相互保険のネットワークやシステム、およびそのなかで培われた民間の日常的な生活倫理、生活価値観、またその上に成立した『仁』『均』を理想とする儒家官僚・士大夫の経世理念の伝統、そこに生まれた大同思想、アナーキ

的な傾向の伝統的な『天下』生民の通念など、いずれも社会主義的な思想に融和的であり、それらも厚い基床となっていた」のである。

従って「社会主義革命としての中国革命は、このようにその土台に民間の儒教的な倫理観、価値観を横たえており、それが革命を法治よりは人治を、専（＝知識・技術）よりは紅（＝道德・思想性）を、『私』よりは『公』を重視するという良くも悪くも道德的な色彩を濃厚にした」のである。

そしてその道德的な傾向が文化大革命で「伝統の破壊」という行為を実現したが、併せて「人治・紅・公」という伝統も極大の発揮を実現し、「文化大革命」の失敗により、「改革開放経済政策」への転換となったことが、かえって現代中国が、「私と公の新しいありかた、人治から法治への転換、紅と専の関係の見なおしなど、ものによっては百年来、あるいは三百年来の難題、法治の制度的な実現にいたっては二千年来はじめての難題に取り組もうとしている」と論評している。

一九五〇年代の「農業の集団化」の社会的背景を「共同体」論を基軸にして、農村社会の構造や機構を分析している筆者からすれば、明清期からの伝統的思想から、現代中

国社会を分析する溝口の問題提起は、農村社会の変容を分析する際には、まさに的を射ていると思われるが、具体的歴史事象からの説明が不足していることも否定できない。そこで次章以下では、村民の日常生活が垣間見れる史料から具体的に検討してみよう。

二 水利から見た現代中国農村社会の現実

(1) 村落檔案史料研究

筆者が前掲「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的 연구」で共同研究の提携先としている山西大学中国社会史研究センターには、大量の「集団化時代の農村基礎資料」が収集保管されている。この基礎資料は、中国では「檔案」と呼ばれる書類で、履歴や思想信条、さらに言動などの記録として保存され、いわば農民の個人情報が多く含まれている。

一九五〇年代から六〇年代に関するこれら基礎資料は、農民の政治動向に関する内容も記載された「階級成分表」と多くの帳簿類、さらに中央・省・県・人民公社レベルの「上級機関」から村に出された指令書類が含まれていた。

この山西大学中国社会史研究センターが保有する「集団

化時代の農村基礎資料」については、既にアメリカ在住の中国人研究者である黄宗智 (Philip C.C. Huang) が編集する『中国鄉村研究 (Rural China: An International Journal of History and Social Science)』第五輯に、行龍が概述している⁽²⁷⁾。

行龍は、『区域社会史比較研究』⁽¹³⁾などの編集も手がけており、文字通り山西大学を中心に、中国の社会史研究をリードしている。

従ってセンターの保管する資料の多くは、人民公社時代の農村社会の実情を細やかに伝えてくれる貴重な一次史料である。これら一次史料の存在は、中国における社会史研究の発展を裏付けるものであるといっても過言ではない。そこでこれら村落の檔案史料を利用した水利研究を山西省の二地域に絞って紹介してみよう。

(2) 赤橋村の水利状況

太原市近郊の晋祠に隣接する赤橋村については、政協晋源区委員会・太原晋祠博物館編『古村赤橋』(山西人民出版社、二〇〇五年)が出版されている。

筆者は、二〇〇七年から何度か、山西大学中国社会史研究センターのスタッフと共に、赤橋村を訪問した。



図1 晋祠の分水所(1)(筆者撮影、以下同様)



図2 晋祠の分水所(2)

赤橋村の元書記の王C Sの説明によれば、中華民国時代までは、晋の始祖を祀る晋祠の泉の水を利用した水稻栽培が盛んであったという。収穫した米は太原まで運んで行き、米一斤に対して高粱三斤と交換したという。

しかし中華人民共和国成立後は、晋祠の水も減少してきた。多量の水を必要とする田植えの時は、最初に水源に近い赤橋村が二〇日間だけ水を使用し、その後その他の村が使用したという。数年前から晋祠の水が減少してきたので、水田も減り、現在ではほとんど水稻作は行われていないという。

図1および図2は、晋祠の中にある真趣亭の泉から湧き出る水を、二方向に分ける分水所の写真である。泉から湧き出た水は、分水所で二方向に分かれる。つまり湧き出た水は、上段のプールに溜められ、七対三に分けられる。灯笼のような形をした石の置物を基点として右と左に、七個の穴と三個の穴に分けられて海清北河(智伯渠)と鴻雁南河へと流れていく。

七対三の理由は、山西大学中国社史研究センターのスタッフによれば、水利が設置された村々の傾斜によるという。つまり傾斜が緩やかな土地が多い村々の方面には、七個の穴から放水され、傾斜が急な地域には三個の穴から放水され、結果として均等な配水という合意を形成している。

北に分水され海清北河に流れた水は、赤橋村では、智伯渠と名付けられた水路に入り、村を縦断している。

中国の農村の多くでは、引水した水道管は地中に埋められている。しかし分水所のような要所では、誰が見ても明らかな比率で分割されて流れていく様子が地表で窺える。

このような分水所は、都市部に近い水源地の多くに設置されている。そして多くの村と同じように、水源の近くには、必ず水神である龍王を祭る龍王廟などの宗教施設が現存している。

晋祠は晋の始祖を祀るところであるが、湧き出る泉の神も、あえて龍王ではなく、晋の始祖に置き換えられている。二〇〇六年八月に山西師範大学のスタッフと共に訪れた、山西省中部の介休市の洪山鎮にある源神廟では、神像が安置されている廟の鍵は、堂守の農民ではなく、廟の真向かいにある介休市洪山水利管理所の事務部門である弁公室主任が保管していた。

大学院を出てきて間もないという主任の説明では、霍州市水利局幹部エンジニアの説明と同様に、給水地域のトラブルを避けるために、旧来からの伝統的な水利慣行を遵守しているという。

晋祠を中心とする赤橋村の近隣でも、旧来からの伝統的な水利慣行が守られている。

なお、最近の赤橋村については、太原理工大学政法学院副教授の渠桂萍が、二〇〇九年九月から二〇一〇年一〇月までフィールドワークを実施している。ただ渠が赤橋村に

ついて、「村の行政幹部は経営企業管理能力がなく、八〇年代末には村が取り扱う企業は市場競争ですべて生き残ることができなかった。一九八三年、土地請負後の赤橋村村民は経営に対して非常に積極的となり個人経済が極めて活発になった。九〇年代初め、村で二五〇戸あまりが子供服を生産し、村の行政幹部も大きな卸売市場を建て、子供服生産を更に大きな規模に発展させようとした。しかし、結局は失敗に終わった」と、否定的に紹介している⁽¹⁴⁾。これは渠が、二〇一〇年一月から翌年一月まで、大阪大学を訪問した際に、南開大学歴史学院教授の張思と共に、奈良県大和高田市で実地調査を行い、「現代村落の日中比較」という視点から、研究を進めた結果、「遅れた中国農村」像が浮かび上がったためである。事実現在の赤橋村は、都市近郊農村として観光業にも力を入れるという局面も現れており、日中両国の農村の単純な比較では問題解決ができない現状にある。

(3) 四社五村における水利関係の変遷過程

①「四社五村」の水利灌漑をめぐる国家の対応

二〇〇三年に中華書局から発行された、『陝山地區水資

源與民間社會調查資料集』(全四卷)のうちの第四卷『不灌而治』と題する資料集には、「四社五村」と呼ばれる地域の不灌漑水利組織(生活用水利用組織)に関する史料が記載されている。

日本での水利研究の第一人者である森田明によると、この資料集は、フランスと中国による、一九九八年から二〇〇二年にいたる五年間の共同研究の成果であり、「水冊」とか「水利簿」と呼ばれる水利のルールを記した冊子などの関係資料の発掘と同時に、調査地域の住民に対する聞き取り調査も含まれているという。¹⁵⁾

筆者は、前出の行龍や、山西師範大学教授の徐躍勤の協力を得て、二〇〇六年から毎年のように、四社五村のうちの橋西村と義旺村および橋東村で、村幹部から過去の水利関係の実情と現在の状況に関する説明を受け、さらに近隣地域との水の配分を約した水冊を閲覧した。

山西省の各地では明清以来の伝統的慣行により、民間の自治組織が水利組織を形成していた。この自治組織は「社」と呼ばれ、水脈にそって複数の村が水の利用の為に作った組織であった。従って社とは自治制を持った「水利共同体」である村落連合とも言える。

しかし、中華人民共和国成立後、多くの民間の水利組織は、用水の確保の厳しさから、その運営を国家管理に委ね、それまでの「水利共同体」は事実上消滅していった。

ところが、山西省中部の山岳地帯に位置する霍州市と洪洞県の境界にまたがる地域には、明清時代の水冊に依拠した村落連合とも言うべき四社五村が存在していたことが、前述のフランスと中国の共同研究で明らかになった。なお、四社五村とは、霍州市と洪洞県にまたがる四つの社と五つの村の総称である。

これらの地域では、前述の「不灌漑水利組織」という名称が示すように、飲料水も含めて生活用水を確保するのがやっとで、灌漑にまわす水の供給は不可能に近かった。

二〇〇七年以降何度かにわたるインタビューの中で、霍州市水利局幹部からは、次のような事実が紹介された。

四社五村では、近年でも水源の水を利用するルールをめぐって、煩雑にトラブルが発生した。それは当該地の水利は全て飲料用となり、灌漑に回す水がなかったことに起因する。

そこで、四社五村の人々は灌漑用には、山西省における大河である汾河からの水に頼らざるを得なかった。

しかし、汾河から霍州市内までは、三〇キロ余りも離れていた。汾河には九つの支流があったので、その一つから電気モーターを利用して汾河の水を汲み上げて、霍州市や洪洞県を灌漑する二か所の灌漑区が作られ、約四万畝の水田が灌漑されるようになった。

霍州市が所属する七里峪灌区では、二〇〇二年に水道管が所属する各村まで繋がりが、村の飲用水問題が解決した。

一方、四杜五村の一つである義旺村では、二〇〇三年に井戸を掘り、水道管で村まで水を引き、貯水池を作った。以前の貯水池は、石で作られており、その貯水量は四〇〇立方メートルだったが、コンクリートで新たに作られた貯水池の貯水量は、二〇〇立方メートルだった。

これらの工事は「義旺工程」と呼ばれ、その経費一四〇万元のうち、国家が五五万元、四杜五村が七一万元、霍州市と洪洞県の地方政府が残りを支出した。

つまり、四杜五村は、霍州市と洪洞県という二つの行政地域にまたがって存在しているので、現在でも地方政府は、水利問題に介入しにくいという現実がある。

山西省には水利工事に関する管理条例が定められているが、地方政府は伝統的な水利慣行を尊重し、四杜五村の中

心的な村で、最も大きな社の中心である義旺村に調整を任せていた。

②「四杜五村」の「水利共同体」的村落結合

一方、橋西村については前共産党橋西村支部書記の張Y Xが、義旺村については元書記の郝J Hが、橋東村については元書記の董H Yが、回答してくれた。それらの回答をまとめると、次のようになる。

この地域では、一九六〇年代中頃の「四清運動」の頃に、霍山の水源から地下に管を埋めて水を通した。当時は、一月に八日間水を使うことができた。水を分ける方法は、昔からの慣習に従った。村では井戸を掘ることもした。井戸を一つ掘るには、ポンプや電気工事代も含めて、一〇万元くらい必要だった。

しかし井戸を掘った後も、四杜五村の連帯感が残った。この地域での取水は、旧暦を用い、洪洞県が一四日間、霍州側が一四日間と決められ、洪洞県の橋西村・杏溝村と霍州の義旺村・南李庄がそれぞれ七日間、霍州の孔澗村が三日間（そのうち、一日は隣村の劉家庄）となっていた。

毎年、「祭社」（「祭」を主催する当番の村）が四杜五村から費用を徴収した。祭社は、水神である龍王を祭る「龍王



図3 龍王像

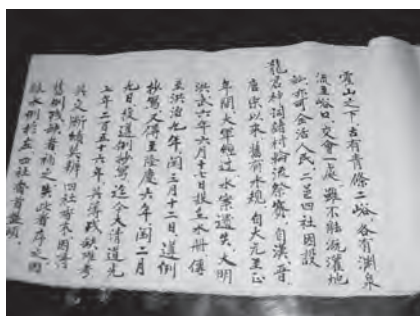


図4 水冊の写本

「廟」近くの水源を見て保守点検・工事を行う「小祭」と、その工事終了後に工事の点検を行う「大祭」を開催した。

図3は、義旺村の幹部が案内してくれた、同村の龍王廟の中の龍王像である。

さらに四月初旬の清明節の時に「吃席看戲」（宴席を設け、芝居を見る）が行われた。その費用は祭社の村が負担し、一九八〇年代には三日間で数千円から一万元を要した。その後、数百円で映画を上映するようになり、二〇〇〇年以降は経済的事情も関与して、映画の上映もなくなったという。

一九七〇年代には、水利をめぐる各地で紛争が起きた。八〇年代になって、四社五村以外の他村も四社五村の水源の水を利用するようになったが、これらの村には水の管理権はなく、干魃が発生した時は、四社五村の取水が優先された。

一九八一年、北京師範大学教授の董曉萍等の調査によって水冊が発掘された。この四社五村の水冊は漢代に作られ、元末に消失したが、明初に再び作成された。図4の水冊は、一九八四年に作成された、清代の水冊の写本である。

水利以外で四社五村が協力することはあまりないが、小麦の収穫作業は村同士で助け合う。洪洞県の橋西村は海拔が低いので早く収穫することができ、一方霍州は海拔が高いので収穫時期が遅い。そこでまず霍州の農民が洪洞県で小麦の収穫を手伝い、その後洪洞県の農民が霍州で小麦の収穫を手伝った。

つまり、この「水利共同体」的村落結合は、水源に近いところに建設された龍王廟での宗教行事での協力を梃子に強化された。そして、この村落結合は、水資源の配分を行うだけでなく、山岳地



図5 幹部の家のマリア画像



図6 義旺村に隣接する高速道パーキングエリア

域での高低差による農作物の収穫時期の差を利用した、労働力交換等の農業面での協力関係の実施主体ともなっていた。

むろん現代でも、社が「水利共同体」としての機能を發揮し、村民に社としての一体感を保持させるためにも、龍王廟での宗教行事は、結合を維持するために欠くことのできない要因の一つであったであろう。

事実、橋東村で三四年間も共産党書記を務めた董によると、社の代表である「社頭（いわゆる社首）」は、中華人民共和国成立以前は、村長が兼任し、共和国成立後は、共産

党書記が兼任するようになり、水利にかかわる時のみ、社頭の名称が使われたという。

また、橋東村は、かつて「永安城」と呼ばれた大きな村であったので、四社五村の「首村（第一の社）」を務めてきた。董によれば、村とは自然の村のことで、社とは徴税の単位だという。徴税のために、五〇戸の村を社と呼び、五〇戸に達しない村は、近隣の、村と合わせて、一つの社としたという。

以上の応答から、霍州市と洪洞県という複数の行政領域をまたぐ四社五村での領域では、従来からの伝統的慣行を尊重した水利運営が行われていたことが確認できる。

ところで、義旺村の共産党元書記の郝の家には、前掲図4の清代に作られた水冊の写本が保管されていた。

写本を見ているうちに、壁に貼られた「聖母聖心像」と書かれたマリアの肖像画（図5）が眼に入った。クリスマスが近いので飾られたのかと思って尋ねると、郝の家は代々のカソリック教徒とのことであった。

郝は前述の『不灌而治』と題する資料集にも登場する、

いわば四社五村のキーパーソンでもある。従って、四社五村の水利を中心とする公共的事業を推進した彼の社会背景を考慮すると、龍王廟での宗教行事が、結合を維持するために欠くことのできない要因の一つであったことを再考すれば、壁に貼られたマリア画像には意外な感じがした。

しかし、郝が共産党幹部であり、伝統的な宗教施設を管理する地域の指導者であったと同時に、四社五村の人々の精神的結束には、カソリックが重要な役割を果たしていた。

つまり、山岳部農村における公共的事業を維持し発展させ、村民の結合を強化するための「宗教行事」自体は、必ずしも個々の村民の宗教的信念とは完全に一致する必要もなく、単に慣習的要素として機能していると理解できよう。

中国内陸部の山西省の、それも太行山脈の麓という厳しい自然状況の中だからこそ、現代の四社五村では、かえって一見緩やかな伝統的な慣習的理念を紐帯とした人的結合が、公共的關係として維持・再生していると考えられよう。しかし、調査を重ねるうちに、伝統的な慣習的理念を紐帯とした人的結合が、決して単純に機能しているわけではないことがおぼろげながら理解された。つまり、四社五村をまたいで高速道路が開通し、さらに義旺村の近くにパー

キングエリア(図6)が完成し、そこに水を供給するようになる、その権益をめぐって四社五村の中に、生活用水の奪い合いを中心とした従来の対立とは異質な対立が生じてきた。各家庭に水道が施設された現在では、四社五村の慣習的行事は、義旺村などの村長の出費によって運営されている。さらに村長の出費により、途絶えていた四月初旬の清明節の時に「吃席看戲」が復活し、わざわざ祭りのために劇団を呼ぶようになったという。

一方、四社五村の水利関係を運営してきた義旺村の社主は、水利局の建設した井戸の管理施設で、各村への給水管理をしている。従って、水利局を中心として、行政側も旧来の伝統的慣習を利用しながら、新たな水利政策を実施しているのである。われわれ現代日本人の感覚からすれば、一見対立するかのように見える要因同士が、可能な限り「格差」を解消し、かえって新たな結合を生成し、厳しい状況の打開に寄与しているのである。この複雑性が、近代人としての自覚にあふれた我々日本人にとっては、ある面での「不可解さ」を生んでいるのかもしれない。

おわりに

二〇一三年八月、中国側の共同研究者である山西大学のあるスタッフから、一冊の本をいただいた。五七七頁にもおよぶ『社会主義新农村建設典型案例研究』¹⁶と題する本は、山西省社会科学院のスタッフが中心となって編集され、『集団経済』『一村一品』などの一〇の項目に分かれて、中国各地の農村での事例が具体的に紹介され、かつ編者からのコメントと、課題解決のため問題が提示された、いわば農村問題解決のテキストであった。その中で筆者が注目したのは、「村官風采」と題する章であった。「村官」とは、大学を卒業後、多くの学生が中央官庁の官僚や外資系企業のエリート社員として就職する中で、農村の幹部、その多くは村の党書記や村民委员会主任（村長）に就職することであった。都市部での大学で勉強した成果を、農村社会の近代化に積極的に関与していかうとする意欲的な若手指導者群像をモデルとして描いているわけであった。中には、農村での経歴を梃に、将来官僚としての出世街道を歩むうえで有利さを求めている実利派もいるだろうが、テキストとして紹介された実例では、モラル的な農村青年群像が

描かれていた。

むしろ「村官」制度は、習近平政権となって、急に登場したわけではなく、胡錦濤政権時代から、農村部における社会的格差解消のために、行政側の対応の一環として現れたものである。

このように、知識青年による農村指導の理念は、「土地改革」や「大躍進」期の農村へ、都市部の青年や役人たちが、工作隊として派遣されたように、過去の社会主義建設運動の中で、しばしばみられた現象である。特に文革後半期に、紅衛兵だった知識青年が、革命精神を低生産力段階にある農民たちに学べという毛沢東の呼びかけに応えて、「下放青年」として辺境の農村に送りこまれたが、受け入れた農村社会にとっては、農業のイロハも知らない頭でっかちの役立たずとして、劣悪な条件におかれていたという悲劇は、中国に限らず多くの人の知るところである。

「村官」が旧来からの知識青年に対する政策とどこが違うのか、十分に検討する必要があることは言うまでもないが、筆者が定点観測している山西省平遥県の村でも、村の党書記は、名目的には「村官」の若者だった。

彼らが本当に都市と農村の「かけはし」になれるのか、

それとも単なる官僚への出世主義的運用に終わるのか、その動向に注視していく必要がある。そして「村官」を生むような中国社会の発想自体が、中国社会の近代化の現状と課題を考えるうえでも、大きなヒントとなる。

- (1) 本節の叙述に関しては、拙著『現代中国農村と「共同体」』（御茶の水書房、二〇〇三年）の第二章「『中国農村慣行調査』の企画立案とその実施」を参照されたい。
- (2) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』（河出書房、一九四五年）。
- (3) 戒能通孝『法律社会学の諸問題』（日本評論社、一九四八年）。
- (4) 平野前掲書、一五一～一五二頁。初出論文は、平野「会・会首・村長」（『支那慣行調査彙報』一九四一年）。
- (5) 平野前掲書、一五三頁。
- (6) 平野前掲書、一五八～一五九頁。
- (7) 平野前掲書、一五八～一五九頁。
- (8) 山本秀夫「中国農村の現代化と『郷規民約』」（『日中経済協会会報』一九八三年五月号）。
- (9) 石田浩『中国農村社会経済構造の研究』（見洋書房、一九八六年）。
- (10) 現代中国の現状に照らして考えれば、「共同体」をめぐる問題は、「平野・戒能論争」も含めて未解決だとする筆者と、中国の伝統社会を「共同体」的ではないとす

る奥村哲氏との間の論争も平行線をたどったままである。このことについては、前掲拙著『日本の中国農村調査と伝統社会』の第九章「華北農村における『共同体』論争と農村社会研究の課題」を参照されたい。

- (11) 溝口雄三『中国の衝撃』（東京大学出版会、二〇〇四年）第四章「歴史のなかの中国革命」参照。
- (12) 行龍・馬維強「山西大学中国社会史研究中心、集体化時代農村基層檔案」述略」（『中国鄉村研究』第五輯、福建教育出版社、二〇〇七年）。
- (13) 北京の社会科学文献出版社より二〇〇六年に出版された。
- (14) 渠桂萍（根岸智代訳）「日本の農村基層組織の機能変遷から見ると中国農村建設への提言——現代村落の日中比較の視点から——」（『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』No.2011-2、二〇一一年二月二〇日）。
- (15) 森田明『山陝の民衆と水の暮らし——その歴史と民俗——』（汲古書院、二〇〇九年）。
- (16) 馬友・孟艾芳編『社会主義新農村建設典型案例研究』（党建读物出版社、二〇〇九年）。

（うちやま まさお・宇都宮大学国際学部特任教授）